

計 二、三九四隻。八〇一八、一二二トン

である。これに対し、建造数は、計 一、三〇三隻。

三、三六七、六八七トンである。また、護衛艦の主力海防艦の建造数は一六七隻である。

昭和二十年六月二十八日現在の、海上護衛司令長官の指揮する兵力は次のとおりである。

一、直率部隊 第九〇一海軍航空隊の大部（各機種約一三〇機）。

二、第一護衛艦隊 第一〇二戦隊（海防艦六隻）第一

〇三戦隊（海防艦一〇隻）第一海防隊（海防艦

五隻）第十二海防隊（海防艦三隻）第二十一海

防隊（海防艦六隻）第二十一海防隊（海防艦八

隻）其ノ他（各種艦艇約八隻）。

三、舞鶴鎮守府部隊 第一〇五戦隊（鹿島、響、海防

艦四隻）第三十一海防隊（海防艦七隻）其ノ他

（約四隻）。

大湊警府部隊 第一〇四戦隊（海防艦六隻）第

十一海防隊（海防艦三隻）第九〇三航空隊（各

機種六六機）其ノ他（各種艦艇約二十隻）。

鎮海警府部隊 直率部隊（小艇）。

第七艦隊 直率部隊（駆逐艦四隻、海防艦四隻）

—第九特別根拠地隊—

「ああわが戦友山尾隊」

長崎県 山尾 萬 樹

私の出生地は長崎県東彼杵郡波佐見町永尾二九六で、大正十一年十月十五日に生まれました。

昭和十四年十二月一日、江田島の海軍兵学校（七十一期生）に入校。昭和十七年十一月十四日、海軍少尉候補生を拝命し卒業しました。

その後、約二か月間、戦艦「扶桑」に乗り、江田島を中心に瀬戸内海で艦隊実務演習を受けました。艦隊実務演習を終えた昭和十八年一月十五日、官中に拝謁を許されまして、宮中三殿の参拝を済ませました。

同日、私は第九特別根拠地司令部付を命ぜられ、佐世保を出港。台湾、フィリピン（マニラ）、ボルネオ、

スマトラ、シンガポールを経てマレーシア半島のピナンへ着任しました。シンガポールを通過する時には、山下奉文大将（第二十五軍司令官）とパーシバル中将（英軍司令官）の無条件降伏に至った歴史を想い、士気を鼓舞したものでありました。日本海軍戦網の最西端ピナンは、もとイギリスの保養地であった。一度山へ入ると、キバのない猪（野豚か）、沼地にはワニが群をなし、二メートル以上もある大トカゲなどが生息している状況でした。

当地で、甲板士官、衛兵司令などを勤務、実戦訓練演習は三日間も連続しました。疲労のため隣を行軍していた準士官が、ドブ田の中に落ち、その田の中で軍刀の鯉口が切れ、抜き身が転げかけた準士官の腹に刺さり、出血多量で絶命するという惨事にも遭い、厳しい演習の連続でした。

駆逐艦で陸軍の輸送船団の護送任務につき、操舵司令中、急にデンク熱にかかり、高熱と共に腰が立たなくななり、寝込んでしまったこともありました。

昭和十八年六月一日、「海軍少尉に任ず」という電

報と、「第一期兵器整備学生を命ず」との指令を受け、シンガポールを経て、空路羽田經由洲ノ崎海軍航空隊（現在の千葉県鋸山市）の学生舎へ移動しました。

兵器学生の教育は、航空射撃、雷爆撃、航空写真、通信・電報探知機（電探）、暗号など極秘の教育で、共に学んで苦勞した期友生の面影が今でも目に浮びます。当時の電探は、型の大きな真空管付のもので今考えると幼稚なものに思えますが、それでもむずかしい操作の教育をうけたことを思い出します。

昭和十九年三月十五日、第三十五魚雷調整班長を命ぜられ、四鎮（佐世保・呉・舞鶴・横須賀の鎮守府）から約百五十名の隊員を得まして門司港に集結し、サイゴンに向かうこととなりました。しかし戦況が変化し、台湾の新竹へ行先が変更になりました。

新竹に着任し、新竹航空隊の片隅の兵舎に入り、施設七五Kの高圧ポンプ二基を備えたポンプ室を設置、内地の二十一空廠から輸送された航空魚雷の調整等に従事しました。当時米軍艦隊は沖繩海域に集結しており、当方はこれに向けての航空魚雷による攻撃を行う

ため、出撃前の飛行機の魚雷搭載に多忙を極めました。

同年十月頃になると、米軍機の空爆回数が多くなり、兵舎、施設、魚雷など飛行場の片隅にある施設は空爆の目標になりやすいことから、新竹十八尖山に作業所、格納庫を移す作業にも多忙を極めました。

沖繩の戦況も熾烈をきわめ、特攻隊による米軍艦隊への体当たりのニュースが伝わってきました。私は矢も盾もたまらず、「死におくれまし」と飛行服に身を固め、日の丸の鉢巻きをして、第二十九航空隊司令部の参謀室へ行き「特攻に出してくれ」と頼みに行きましたが「部下と魚雷をどうするか、貴様の命は俺が預かる」とどなられ、追い出されたことを思い出します。

また、昭和二十年八月十五日、天皇陛下の終戦詔勅を聞いて、自決すべく山頂に上がり、拳銃をとり出し、短刀の鞘を払った途端、部下から羽交締めにされ自決ができなかったことなど、今にして思えば実に恥ずかしいし、身の毛もよだつ思いがして、「あの頃は若かったなー」と走馬灯のように思い出が走ります。

残念でならないのは、新竹において十八名の部下を

米軍の空爆によって亡くしたことです。なかでも、軍務命令で外に行っていた部下が一日早く現隊復帰したため、その空爆の犠牲となりました。人間の運命を目前で見た感じがしました。

昭和二十年八月十五日以降も現任務続行という命令が出ました。程なくして私の部隊は解散し農耕班となりました。私は第二十九航空隊司令部付を命ぜられ、残務整理にあたりました。

昭和二十一年三月、台中から汽車に乗りキールン港に至り、ここから出港して鹿兒島港に復員しました。

復員当時の階級は海軍大尉で年齢は二十三歳でありました。復員後の昭和二十一年五月、中学校の同級生の妹と結婚しました。

私はB項該当追放（職業軍人であったため、公職につけない）のため職がなく、しかし遊んでいるわけにはゆかず、昭和二十四年佐世保駐留米海軍（涉外管理事務所）の通訳として勤務しました。

昭和二十七年海上自衛隊に応募しましたが病気のため失格となりました。肺浸潤で肺葉切除の大手術を受

け、嬉野国立病院で昭和二十七年から三十一年間の闘病生活とアフターケアの病床生活を送りました。病気もようやく癒え、地元伝統の基幹産業である陶磁器の錦上絵付作業をやりながら、波佐見町町議会議員として七期を終えました。その間長崎県町村監査委員会連合会会長三期、郡連合会会長を三期勤めました。

私が関係した第三十五魚雷調整班、海軍イ一二二部隊時代の戦友と戦友会を組織し、戦友会の名称を「山尾会」と名付け、昭和四十六年に第一回の会合を開催し、現在まで二十回以上の開催に至っています。

この戦友会は日本列島各地にわたり、慰霊祭も併せて行っています。戦死者、戦没者、物故者の遺族を訪問し、八十八歳、九十五歳の両親らと語らったこともありました。

昭和五十三年には、台湾新竹州知事の許可を得て、戦友十二名と共に、新竹の地に赴き、墓標を建て慰霊祭を行いました。現在も新竹の先生に墓地・墓標の管理をお願いしています。

平成二年十月十三日には私の地元にある九州八十八

か所第六十六番霊場「東前寺」において高さ約五十センチの大日如来像（本彫刻）十三体の入魂式を行い、戦友と共に五十回忌慰霊祭を行って戦死者の遺族に贈りました。

会員も年々減っていきませんが、何度会っても苦しかったこと、楽しかったことなどを夜を徹して話に華を咲かせて、この時ばかりは昔に帰った気持ちにひたります。戦友の子供さんの結婚の世話や数件の媒酌人（中には横浜まで行った）を勤めたこともありました。私の三人の娘は既に縁付き、外孫七人いて、我が家は妻との二人暮らしになりました。この頃は女房の方が強くなって「山尾会」の時だけは一番上座に座ることが出来るので楽しくやっています。

あの当時下士官であった方が現在では偉くなられ、中には県知事さんと対等に話のできる有力な人や、多角経営で業績を上げた金満家もおられて、誠に愉快であります。

私も今まで、幅広い役職についていましたが、大半はやめて、今は軍人軍属恩欠者全国連盟長崎県連合会

長、地元の波佐見支部長を兼務しています。

「柳に風折れなし」といいますが柳の小枝に吹きつける風は厳しかったです。中学四年から海兵の門をくぐり、微分、積分も分らないままに海兵から一年生の最初の期末テストを病室に入室中に受け、終戦後は、肺切除の大手術をして海上自衛隊に不合格などです。

しかし、二度とない生涯も清貧に甘んじて自らを戒め、今だにあの五省を座右の銘として、同期の桜を口ずさみながら「俺の人生拙なれど佳なり」と自画自賛の日々を送っています。

あゝ我が戦友山尾隊

祖国の危急に召されきて

横空基地の桜の下

運命は共に胸に秘め

あゝ我が戦友山尾隊

早鞆浦を船出して

夕日に沈む島影に

臉に浮ぶふる郷の

夕鞆たのしきいろり端

征く地も知らず異国と

進む船団あし重く

敵潜脅威の海原に

明日の運命を誰ぞ知る